

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第23回 ウガンダの教育事情

これまでのカンパラ通信では最近ウガンダの食文化を紹介させていただきましたが、今回は日本の方には関心が高いと思われる教育について取り上げてみることにしました。ウガンダ国内を車の移動中に気が付くのは、沿道に学校の校舎や学校名を記した看板がとても目立つことです。それも公立・私立を問わずなのでその数の多さが想像できることと思います。こういうことからウガンダ人の教育の熱心さを感じていたところでした。沿道を歩く制服を着た小学生を観る機会も数多く（ウガンダでは小学校の児童も中等教育校に就学している生徒も制服着用となっています。）、また、仕事柄小中学校を訪問することも多いのですが、子供たちの目がキラキラし、満面の笑みを浮かべて歓迎してくれることも強く印象が残っています。もちろん、後で述べますように数々の問題点が指摘されているのも確かですが、外見だけからは元気そうに通い、また、学習する子供たちを見るたびにこの国の将来は明るいという気持ちにされます。それではまずは、ウガンダにおける教育制度を概観した上で、現在この教育界がどういう課題に直面しているのか個人的な体験・経験を含めて皆様にその一端なりとも知っていただきたいと思います。



休憩時間に寛ぐ子供達



サッカーをする子供達

ウガンダの基本的な教育制度は初等教育が7年、これに続いて前期中等教育（Oレベル）4年、後期中等教育（Aレベル）2年とあり、その後大学等の高等教育への道が開かれることとなります。初等教育とは小学校での教育を意味しますが、ウガンダでは6歳を迎えて2月初旬から小学校に通います。ウガンダの前期中等教育が日本の中学校、後期中等教育が日本の高等学校に当たるといってよいでしょう。

新学年度は通常2月初旬に始まります。日本より二か月早い新年度の始まりですね。始業は午前8時で午後4時には下校が通常ですが、3年までの低学年では午後1時が下校時刻

となっています。一年3学期制で、概ね1学期は5月初旬まで、2学期は5月末から8月中旬、そして3学期が9月中旬から12月上旬までとなっています。クリスマス祝日のある年末の休みが長いのは、きっと国民の多くがキリスト教徒だからでしょうね。履修科目は、国語（部族の言葉）、算数、社会、理科、芸術・体育といった馴染みの科目に加え、英語、スワヒリ語（ウガンダの第2公用語）、宗教といった8科目になっています。英語を小学校の段階で学ぶので、ウガンダでは多くの人が英語を話し私達日本人にとりまして本当に有り難い状況です。スワヒリ語が履修科目に入っていますが、現実にはあまりこれで会話するシーンは見たことがなく、国全体で見れば共通語が英語になっています。最終学年である小学7年生時に全国一斉の卒業試験（PLE：Primary Leaving Examination）があり、これに合格することが中等教育に進む条件となっています。試験科目は、算数、社会、理科、英語の4科目でこれが主要科目と言えそうです。ウガンダ政府は1997年に全ての子供たちが小学校に通えるための政策を導入して授業料は無償となっています。そのおかげで小学校への就学率は飛躍的に拡大し、現在では9割以上の子が就学しているとのデータがあります。1997年以前はいったい何割の子ども達が就学していたのかは、確認できない状況ですが、1996年には310万人の小学児童数が2003年には2.5倍の760万人となっていますので大きなインパクトがあったといってよいでしょう。ほぼ義務化した小学校教育とはいえ、教科書は自分で購入しなければなりません。更には、学校に通うための交通費、学用品の購入等の経費は必要となります。また、ウガンダでは、交通が発達していないことや女子児童を中心に通学中の安全確保が十分でないことから小学校でも全寮制をとる学校が少なくないのです。そうなりますと、寮費や食事にかかる経費が高くなり、子どもを学校に通わせる両親の負担は決して楽ではありません。そのような理由もあって小学校を途中離脱してしまう児童数が多いことが、大きな社会問題となっています。小学校教育を終える児童の数は入学時の6割未満と言われ、サブサハラ・アフリカの平均より低い数字だということです。一方で校舎や教師の確保が追い付いていないことも問題の一つに挙げられます。国の制度では1クラス当たり児童数40人と決められています。実際にはこの数字を遥かに上回り1クラスの児童数が100人以上となっているケースも珍しくないようです。その様なケースでも一クラスの教師は一人と、驚くばかりです。



すし詰め教室



女子寮の様子

次に中等教育についてですが、小学校から中等学校への進学率はよくわかりません。小学校を終える児童の数が出ていないからです。しかしながら、小学校の就学者数と中等学校の就学者数を比較すると概ね6 : 1になるとの調査結果があります。これらのことから相当の数に上る子ども達が小学校のみで教育を終えると言えそうです。前期中等教育(Oレベル)では24科目の中から10科目を選択履修し、4年生の時にOレベル終了認定試験があります。この試験に合格しますと後期中等教育(Aレベル)に進級できることとなります。そして後期中等教育を終える前に再び試験があり、これに合格することが大学進学するための条件となるのです。なお、初等教育での授業料の無償化が1997年に導入されましたが、中等教育でもそれから遅れること10年の2007年にして待望の無償化が導入されました。中等教育の無償化が導入されたのはサブ・サハラの世界の中ではウガンダが初めてでした。このことから冒頭に申し上げたウガンダ人の教育への熱心さを感じていただければ有難いです。しかしながら、これは全ての中等教育校ではなく、学費が一定の額を下回る初期中等教育校のみに適用されています。また、全ての就学者が無償化の対象者ではなく、小学校卒業試験で所定の点数以上の成績を上げた生徒のみが学費が無償となるものです。たぶん国の予算の関係から全ての中等教育就学者へ無償化が適用されないとは思いますが、名称が現実に追いついていないことに若干の違和感を感じるようです。

最後に大学について少しお話します。大学には、後期中等教育を終えた生徒の約35%、3万人ほどが進学しております。この数字は日本の1972年の大学進学率と同じです。ウガンダには東アフリカ地域の名門校とされているマケレレ大学があります。ウガンダ政府は、首都カンパラにあるマケレレ大学だけではなく、全国にわたって大学の開設に力を入れており、現在では国立大学が11校あります。このほか、数多くの私立大学が生徒に門戸を開いております。学生の多くがホワイトカラーへの就職を望み進学しますが、社会にはそれを吸収するだけの職場はなく、多くの卒業生が就職に苦しんでいます。新設の大学の中には、もっと就業可能性を重んじそれに直結するような教育を用意するところが出

てきています。

初期中等教育に代わって、3年間の職業訓練校に進む道が開かれています。日本での工業・商業高等学校教育を小学校卒業後に受けることになるとも言えるかもしれませんね。同じように初等中等教育を終えた者には高等専門学校、初等教育教員養成校へ行く道が別途開かれています。

小学校、初期中等教育及び後期中等教育を終えると全国試験があることは既にご紹介しましたが、この結果は日刊紙で大きく報道されます。全国試験に合格した児童・生徒たちの喜びの顔写真が掲載されます。どこの学校が優秀であるのかもこの報道で判断されますし、成績優秀者の個人名も報道されます。そういう意味でも各学校での卒業前の全国卒業試験は一大事件です。このようなことからウガンダでの教育に対する関心の高さが窺われます。他方、この小学校の全国卒業試験は主要4科目以外の科目は、評価の対象にならないため、学校での授業も主要4教科以外はあまり重視されないという傾向があるようです。日本でも高校の選択科目が大学センター試験で定める科目に左右されるという風に聞きますので、事情は同じかもしれませんね。



成績優秀者が1面トップに

最後に、ウガンダの教育が直面している教育面の課題について、筆者が見たり聞いたりしたに基づいて触れてみたいと思います。

大きな問題の一つとして、教育施設及び教員の量・質の両面で児童・生徒の増加に追い付かないということが挙げられると思います。既にご紹介しましたように1997年小学校の授業料を無償化し、喜ばしいことに多くの児童が小学校に通うようになりました。しかし、予想以上急激に就学する児童数が増えたため、校舎も教師も足りない緊急事態となり、

勢い1クラス当たりの児童数も増えることになりました。その上、ウガンダの人口増加率が世界でトップクラスなことが教育施設及び教育人材不足に拍車をかけ、教育の質の面でも悪影響を及ぼしています。もちろん、政府も努力していますが、毎年度の教育予算で十分に各種の問題を賄いきれない実情は明らかです。そのため、世銀を始め日本を含む開発ドナーもこの面での協力をしてきていますが、まだまだ教育への投資は必要不可欠なのです。中等教育の事情も同様です。小学校を卒業する児童が増え、無償化による受入就学者の増加と相俟って初等教育同様の問題を抱えております。



中等教育校女子寮の引渡式から

二番目の問題は教師の質のです。1クラス当たりの児童数が多いことで教育の質に悪影響を与えていると書きました。その一方で教師の質にも問題があるように思えてなりません。授業の方式は教師からの一方的な講義が一般的で、教師が黒板に書いたものを児童・生徒がノートに取り、そして教師はそれを児童・生徒に暗記させるというのです。そのため児童、生徒に自ら考えさせる・自分の考えを持つという教育ができないという弊害が出てきているのです。1クラスの児童・生徒数を考えると仕方が無いかもしれませんが、原因はそれだけではありません。児童・生徒数の増加に対応して教師を配置しなければならないことから、教師の授業対応・学級運営に対する教育まで手が回らないということが教師の質の低下を招いていると考えられます。また、教師の給与が低く、つい最近まで小学校教師の基本月給が200米ドル程度でした。最近それが見直され増額される方向ながら、低収入では教師が魅力に欠ける職業ということも質の低下に繋がっているのが確かかもしれません。そのため学校を無断欠勤したり、授業に遅刻する教師は珍しくないようで、新聞でこのような現象が強く批判されています。生徒が授業をサボったり、遅刻するのは全く逆転の現象が報道され批判されるのは無理の無いことです。

それから嘆くべき問題がもう一つあります。教師の体罰の日常化です。児童・生徒をムチで叩いたりすることは珍しくないそうです。この事実が欧米の国々から批判されています。

体罰で筆者が思い出すのは、小学生の頃に教師が児童を教室の後ろに立たせることが珍しくなかったこと。教師が問題を起こした児童・生徒を小突くという、40年以上も前の出来事です。ウガンダの家庭教育を知らない筆者が申し上げられるのは、体罰を文化的な問題と捉え改善する考え方もあるかもしれないということです。

この様に多数の課題を教育に抱えているウガンダですが、すぐには無理にせよ、一步一步問題が解決されて、ウガンダの若者が自らの能力を開発でき自分の明るい未来を築けるようより良い教育環境の中で育っていけることを強く希望しています。

(以上)